

Title	定年に当っての感慨
Sub Title	Some notes upon my retirement (with biographical resume list of publication)
Author	村松, 暎(Muramatsu, Ei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.529- 537
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0529

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

定年に當つての感慨

村 松 暎

私の人生は流れに漂うものだったという気がする。もともと志を立てたり計画したりという性ではないから、終着がどこだったとしても、思わざるところであつたに違いない。

中国文学を専門にしていると、年配の人に時々「お父様の影響ですか」などと言われることがある。だが実際には、ここから成り行きが始まっているのだった。昭和十六年に慶應の予科へ入って間もなく、予科生の間に、学部の専攻の下部組織を作ろうという話が出た。哲学会だとか国史学会だとか英文学会だとかが次々と出来た。が、支那文学会だけは誰も始めようとする者がなかった。すると友人に「お前、支那文学会をやってみろよ」と言う者があり、「じゃあ」ということになって募集してみたなら何人か集まったので、医学部の留学生で王君という人に頼んで中国語を教えてもらつたり、漢文の先生に中国文学の話をしてもらつたりした。戦争が激しくなり、三年は半年に短縮され、十八年の十月に学部へ進学することになった時、支那文学専攻を選んだのは、そんないきさつから当然のことだと思つただけで、別に中国文学に興味や関心を持っていただけではなかった。中学生のころはディケンズのファンだったくらいだ。

その年の十二月に召集を受けて兵隊になったが、月の内に病院送りになり、つづいて療養所へ移され、そこで終戦の翌年まですごした。文学部一年に復学したのは二十二年の十月だった。丸三年の遅れになったわけだが、何が幸いするかわからないもので、いささか知恵おくれ気味の私には、ちょうどいい成長過程に達していた。

復学する前に、学校へ戻るのを諦めて半年ほど月給取生活を経験したので、二十五年三月に卒業することになって就職する気になれなかった。それだけの理由で父親にねだって大学院に残った。傍ら中等部の非常勤講師をやり、大学院終了と共に教諭になった。当時の中等部は草創期で教員の年齢も若く殆どが独り者だった。先生も生徒も一緒に遊んで暮らした。そんなことをしていると、何を見込んだか奥野信太郎先生が大学の助手にしてくれた。二十九年のことである。

奥野先生は学問を叩き込むという先生ではなく、いつも「仕事をしながら、そこから勉強して行かなければ駄目だよ」と言われ、原稿の世話などして下さった。だから、私に学問というものがあるとすればの話だが、まったくの我流である。伝統に染め貫かれた中国学の中で、こういう我流というものが成り立つかどうかということがそもそも問題で、自分でも主流に対して異端であることは認めないわけには行かない。異端はたいてい少数派で、場合によっては一人きりかも知れないが、それだけ頑固になって、誰が何と言おうと俺の方が正しいと思ひこまなければならぬ。多数の中で孤立するという、みんな一緒の日本の社会では不快な構図が、私の人生の枠組みとなった。

その第一波は中国の文化大革命であった。文革には多くの予兆があった。「文芸講話」から始まって「紅樓夢論争」「胡風事件」「百家争鳴」「反右派闘争」「大躍進」「業余作家運動」「調整期」とつづいて文革に至る。紅樓夢論争が起つたのは、私が「紅樓夢」に耽溺しているころだったので、関心を持ったのは当然であった。まだ文献が自由に手に入らなかったが、出来るだけ目に觸れたものを読んだ。殆どすべてがマルクス主義文学論を機械的に当てはめたもので、そのためはずいぶん無理な牽強付会をしているものが殆どだった。文学として全く納得できるものではなかった。その感想をまとめて「紅樓夢論争に対する批判」という題で「藝文研究」に出した。胡風事件が起つたのはその翌年だった。これも、

胡風に対する罪状の告発が常識で見ても体をなさぬものだった。

さらにその翌一九五六年、私は中国へ行く機会を得た。若手の黨員である文学理論家が週に二、三回ずつ中国語の相手をしてくれるために宿舎へ来てくれた。話は自然と紅樓夢論争に及んだ。私の批判を彼は一々反駁した。そこで私が「あなた方はあの魅力的な紅樓夢を、そんなに固苦しく面白くなく読むのか」とたずねると「いや、読む時には違う」という返事だった。これは中国文学を考える場合の大きなカギを私に与えてくれた。そのうちに百家争鳴が始まった。すると彼は「お前の言うことは面白いから論文を書いてみろ」と言った。私は北京以外の土地も見たかったが、それを犠牲にして、ずっと居座って論文を書いた。それはその翌年「人民文学」一月号に掲載された。しかし百家争鳴は間もなく反右派闘争に転じた。あの陳さんはブルジョア論文を斡旋した罪に問われなかっただろうか。彼の消息をその後聞いたことはない。

大躍進の猪突政策は大失敗に終わったが、その間の日本における評価は、どういふわけか大層高いものだった。業余作家の作品はゴミの山だったが、日本の研究者は、無数の作家が出たからには期して待つべきものがあると、まるで文学にも人海戦術が通じると思っているような評価をした。

この失政の調整をした人々を打倒して、再び盲進暴進に転じたのが文化大革命であった。科学的経済的合理性を欠いた人海戦術に頼る大躍進の失敗の建て直しをする調整政策およびその施行に当った人々を根こそぎひっくり返す文革が、いつそう粗暴な非合理主義で、極端な精神主義・個人崇拜に突っ走ったのは勢いの当然というものであったかも知れないが、それはもう狂気の嵐とでも呼ぶほかはなく、とうてい政策などと言えるものではなかった。私はそのことを「毛沢東の焦慮と孤独」という本に書いた。しかし日本の言論界は挙げて文革の前に拝跪し、近代を超克する人類の夢を

実現する崇高な政策であるかの如き高い評価で満たされ、孤独に陥ったのは私であった。古典的深遠な学殖の持主の集団であるはずの日本中国学会までが興奮して「今こそ中国の学者と交流せねばならぬ」という大会決議を行った。

これはどういうことなのだろうか。文革は特別だとしても、中国人の思考の中に何かそれを生み出す原型といったものがあるのではないか。日本人の中国評価にも根強い特殊なものがあると云わざるを得ない。私はそんな思いにとられるようになって行つた。こういう問題は論文になりにくい。散発的に雑誌などに書くほかなかった。「中国三千年の体質」という本は、ある時点で私の中国理解をまとめたものである。そしてこのごろになって、中国が二千年にわたつて思想統制の下におかれた国だということに思い到つた。たとえ善なるものにせよ、それだけで人間の営みの一切を律するのは無理だ。無理を強行すれば、そこに種々の歪みが生ずる。それは善を説いた思想にさえ歪みを与えているはずだ。その歪みのあり様の解明に努めるのが中国研究でなければならない。わが国の中国文化の受容は長い歴史を持つが、それは善なる教へと、その善で統一された文化を「学んだ」のであって、実体を説明しようとする研究ではなかった。いまだに中国の学問を無批判に学ぶことが中国学の正統になっている。

今年日本中国学会創立四十周年で、記念シンポジウムが行われ、私は問題提起者の一人に選ばれたので、この現状の打破が急務であるという意見をのべた。それは学会全体に対する批判ということになる。私は猛烈な反論を受けるか、総スカンを食うことを覚悟していた。が、結果は完全な無反応であった。一つの意見も質疑も出なかった。一人で力んで空振りをしただけに終つた。

私は今年度で慶應を定年になったら、よその大学に行くことになっている。もう三年くらい前に、古い同僚でその大学へ行く人が誘ってくれたのだ。新学部が出来るについては、文部省へ申請を出すに当って、教授の頭数を揃えなければ

ばならないのだということだった。私を必要としてくれるところがあるというのは有難いことだと思って、承諾したが、それだけではないようである。慶應を辞めても、また月給を貰うところができるというのが、何か将来に対する安心感を持たせたことを否定するわけに行かない。長年月給を貰いつづけて、月給取り根性が身にしみこんでしまっていたと思わざるを得ない。四十年近く、いやしくも学問をつづけて、その程度の人間にしかならなかったのだと思ひ知るのは、晩年のことであるだけに、かなり強烈な苦々しさである。

六十五を過ぎてから、どれほどのことが出来るか疑問である。いつ頭が朦朧となって来るか知れたものではない。ただ現在から考えて、あと二三年はそういうこともなからうという気がする。とすれば、ここ何年というものは、私に残された、かけがえのない時間だ。若者に何かを教えるということが無意味だなどと言うのではない。しかし、最後の一瞬に等しい時を、せめて自分のために残しておくべきではなかったかと思うのである。

客観的に見た場合、私のやって来たことにどれだけ価値があるのかということとは、正直に言ってわからない。だが、晩年になって気がついたことが、中国研究の重要なポイントだと自分で思うなら、もちろん結論に到達するなどということはあり得ないとしても、それを考えつづける方が、人生を歩んだことになるのではないか。人がそれをどう評価しよう、それは私自身の問題ではない。「人知らずして慍みず」だ。

私には悪い癖があつて、よくも考えないで事を決め、どたん場になって後悔することがしばしばある。どうやら人生の最後に、その悪い癖を出してしまったような気がする。

村松暎教授略歴

大正十二年八月十五日生まれ。昭和二十五年三月 慶應義塾大学文学部中国文学専攻卒業。同年四月 同大学大学院文学研究科入学。昭和二十七年三月 同大学院修士課程修了。同年四月 慶應義塾中等部教諭。昭和二十九年四月 慶應義塾大学文学部助手。昭和三十一年四月 同大学専任講師。昭和三十三年四月 同大学助教教授。昭和四十年四月 同大学教授。昭和五十二年四月～五十四年三月 香港総領事館調査研究員。昭和六十四年三月 慶應義塾大学文学部停年退職。

他に、慶應義塾外国語学校・慶應義塾女子高等学校・東京大学・東京大学教養学部・成蹊大学等の非常勤講師。文部省大学設置基準委員会委員・慶應義塾女子高等学校校長・慶應義塾藝文学会会長・塾生新聞会長等を歴任。

執筆目録

(1) 著書

『毛沢東の焦慮と孤独』（中央公論社・一九六七）。『中国列女伝』（中公新書・一九六八）。『警説史記』（中央公論社・一九六八）。『五代群雄伝』（中央公論社・一九七二）。『理想の敗北——孟子』（新人物往来社・一九七三）。『中国三千年の体質』（高木書房・一九八〇）。『中国つれづれ草』（あずさ書房・一九八二年）。『中国の故事・名言ものしり辞典』（大和出版・一九八三）。『項羽』（集英社・一九八六）。

(2) 共著・事典・編集

『中国の八大小説』（平凡社・一九六五）。『文学史』（大修館書店・中国文化業書5・一九六八）。『世界文学入門』（集英社・一九六八）。『晋の文公』『漢の武帝』『永樂帝』（『人物中国の歴史』各第一巻・第四巻・第八巻所収。集英社・一九八一〜八二）『古典は語りかける』I（築地書館・一九八二）。同II（一九八三）。同III（一九八四）。『知略』（経済界・一九八八）。『小説（中国）』（ブリタニカ国際大百科事典9・一九七三）。『中国文学十二話』（NHKブックス75・一九六八）。

(3) 翻訳・小説

『杭州綺譚』（酣燈社・一九五一）。『今古奇観ほか』（盛光社・一九六七）。『画本西遊記』全六巻（中央公論社・一九八三）。『濁流』（『文学界』一九六六年三月号）。『小説・則天武后』（『自由民主』一九七七年一月〜十二月号）。

(4) 論文

我対『紅樓夢』二三看法（『人民文学』一九五二年一月）。紅樓夢の小説性——周汝昌の「紅樓夢新證」をめぐって——（『芸文研究』第四号）。紅樓夢論争に対する批判（『芸文研究』第五号）。『紅樓夢』後四十回の評価（慶応義塾創立百年記念論文集「文学」）。小説家としての李笠翁（『芸文研究』第十四・十五合併号）。中国文学に現われたる女性像について（『芸文研究』第十九号）。賈宝玉を通して見た『紅樓夢』の思想（『芸文研究』第二十七号）。蒲松齡と『聊齋志異』（『芸文研究』第四十四号）。

(5) 評論・その他

「杏花天」「拍案驚奇」「如意君伝」「大宋宣和遺事」「金瓶梅」「牡丹奇縁」「明宮十六朝演義」「漫画読本」一九六三年二月号～八月号)。整風運動と中国の文化(『中央公論』一九六六年七月号)。毛沢東の焦慮と孤独(『中央公論』一九六七年二月号)。再び文化の蒸発について(『中央公論』一九六七年五月号)。道德の国のデカダンス(『批評』12・一九六八)。中国人の価値観と日本(『エグゼクティブ・ゼミナール』第八号・一九七三)。中国小説の諸問題(『文化会議』第44集・一九七三)。中国の幽霊(『國文学』一九七四年八月号)中国人の歴史意識(『三田評論』一九七五年十月号)。書人の伝記(『書道芸術』第十卷・一九七六)。中国的思考形態について(『劇場』16・一九七七)。中国古典思想と現代(『文化会議』第94集・一九七七)。中国的思考(『三田評論』一九七八年十一月号)。中国の作家と権力(『海外事情』No.12・一九八二)。中国の悲劇(『ESP』No.122・一九八二)。模索中の中国文芸(『中国問題』第4号・一九八二)。劉邦と項羽のリーダーとしての違い(『関西経協』一九八三年八月号)。私の孔子観(『問題と研究』第13卷一号・一九八三)。中国の人間観(『中国問題』No.5・一九八三)。中国問題(『善隣』No.71・一九八三)。「傷痕」文学について(『中国問題』No.8・一九八四)。無頼の徒の中国文学(『漢文教育』創刊号・一九八五)。一九五六年・北京にて(『中国問題』No.11・一九八六)。南呉北斉の世界(『文人画粹編』中国篇10・一九八六)。過渡期と道徳(『文化会議』206号・一九八六)。中国における権力の交代(『新国策』54卷14号・一九八七)。権力の座の魔力(『中国問題』No.14・一九八七)。混沌の世界に住む中国人(『芸春秋』一九八七年十月号)。中国理解のむづかしさ(『文化会議』226号・一九八八)。儒教を呼び戻してはならない(『日本及日本人』一九八九年一月)。

中文編集部注：村松教授の執筆活動は、これら以外にも随筆・時局論評等々きわめて多岐にわたり量的にも夥し

い。右に取上げたのは、総ておよそ原稿用紙（四百字）二十枚以上の中国に関するもののみ限定したが、少なからず遺漏があると思われる。また講演・講座・座談・シンポジウムの類もたいへん多いがすべて省略する。